



パラグナ・グループによる

# ガムラン曼荼羅

“響きの回廊へ”

曼荼羅となったガムラン。陰陽としての植物文様  
さまざまな照合によって、彩色される響きの回廊

2回公演

2020年 11月19日(木)、20日(金)

トーキョーコンサーツ・ラボ

19時開演(18時半開場) ※両日とも

定員:50名(各回)

前売予約:3,000円/当日:3,500円

## 【出演】

パラグナ・グループ(ガムラン)  
西山まりえ(中世ゴシック・ハープ)  
石川高(笙)  
佐草夏美、ボヴェ太郎(舞踊)

## 【演目】

藤枝守 作曲

- ・植物文様第27集「台湾茶の植物文様」(2018) ガムラン・バージョン初演
- ・ガムランをとまなう《笙とハープのためのダブル・コンチェルト》(2020) 初演
- ・組曲「ガムラン曼荼羅」～「植物文様ガムラン曲集」から(2020) 初演

第20回佐治敬三賞推薦コンサート  
芸術文化振興基金助成事業



## ガムラン曼荼羅 ～響きの回廊へ～

藤枝守

2018年に「パラグナ・グループ」と協同して開催された「ガムランが織る」という公演は、博多織の機音の律動にガムランを同期させる試みでした。それに続く本公演では、このガムランという有機的な組織体に対して「曼荼羅」という図像イメージや「陰陽」といった二元性を与えることによって、象徴作用のなかでどのようなガムラン体験が導かれるのか、新作となる《ガムラン曼荼羅》を通じて試みようと思います。

《ガムラン曼荼羅》に先立ち、二つのガムランのための新作が演奏されます。そのひとつ「植物文様第27集～台湾茶の植物文様Ⅰ」は、台湾大学アーティスト・イン・レジデンス・プロジェクトとして、台湾大学の実験農場の茶樹から採取された電位変化のデータによって作曲され、2018年に中国の古箏によって初演されました。このあらたなバージョンでは、ペントニックに調弦された古箏が醸し出す抑揚や響きがガムランの響きに転写されます。

前回の公演では、ゴシックハープとガムランによる《ハープ・コンチェルト》が初演されましたが、その続編となる《ダブル・コンチェルトⅠ》は、ゴシックハープに笙を加えた二つの独奏がガムランをもととなって展開する三楽章形式となっています。ピタゴラス音律による二つの独奏楽器とガムランとのあいだで生じる音響的な「ずれ」や「ゆらぎ」のなかにハイブリッドな様相があら

われ、それは「世界は音楽の丸い連続体である」というルー・ハリソンの教えが反映されています。

そして、最後に「響きの回廊へ」という副題をもつ《ガムラン曼荼羅》が演奏されます。客席が会場全体に円環的に並べられ、その中央にコングが据えられています。そのコングを四方から取り囲むようにシンメトリカルにガムランの楽器が配され、この曼荼羅のような舞台のなかで8つの楽曲が組曲として展開していきます。それぞれの楽曲は、「陰陽」をなす異なる五音旋法に基づき、個々の楽曲がもつ音調の変容のなかに「響きの回廊」がまたちづくられていきます。そして、この「響きの回廊」の淵を辿るかのように二人の男女の舞踊が交互に現れます。

このチラシのメインイメージとなった曼荼羅の図像は、パラグナ・グループの練習スタジオにおいて、長年にわたってガムランの楽器を覆ってきたインド更紗の文様。その木綿の曼荼羅にガムランが発する波動のエネルギーが織り込まれているように思えたのです。無限に渦巻くようなエネルギーをどのように曼荼羅化したガムランの響きのなかに変換していくのか。ぜひ、「ガムラン曼荼羅」の公演にお越しください。

なお、本公演は、今年3月末に予定されていましたが、コロナ禍の影響により延期されました。



「ガムランが織る」公演～杉並公会堂小ホール、2018年2月16日  
(Photo: 高島史郎)

### ガムラン・ドゥグン

スダ(西ジャワ)には中部ジャワのような強力な王宮が成立しなかったため、大規模なガムランではなく、状況に応じたさまざまな小編成ガムランがある。ドゥグンは貴族階級の儀礼用のものをもとに戦後整備されたもので、舞踊や芝居には用いない。本来は器楽だが、古典曲に歌を入れたものや新作歌曲も多く作られている。バリ島でもレストランなどのBGMとして愛好されている。



ルネサンスの植物文様(KCD-2070)  
西山まりえ  
(ルネサンス・ハープ、イタリアン・チェンバロ)  
「植物文様」シリーズから(作曲: 藤枝守)  
JANコード: 4562257810482  
レーベル: OMF(オアシス・ミュージック・ファクトリー)  
取り扱い: ナクサス・ジャパン  
2800円(税込)

西山まりえによる「ルネサンスの植物文様」。このアルバムでは、ルネサンス・ハープ、そしてイタリアン・チェンバロによってあらたな「植物文様」の楽曲が織り込まれていきます。とくに、2018年に作曲した《台湾茶の植物文様》も収録。茶がヨーロッパに紹介されたのは16-17世紀。茶から生まれたメロディが、まさにその時代の楽器で響きます。

### 西山まりえ

チェンバロとヒストリカル・ハープ、2種の古楽器を自在に操る稀有なプレーヤーとして世界的に知られ、数多くのコンサート、音楽祭や録音に参加。国内レーベルへの録音も多く、「レコード芸術」誌特選盤や朝日新聞推薦盤に選ばれるなど高く評価されている。東京音楽大学研究科修了後、ミラノ市立音楽院、バーゼル・スコラカントールムに留学。第11回山梨古楽コンクール・チェンバロ部門第1位および栃木「蔵の街」音楽祭賞受賞。第23回同コンクール審査員。古楽ワークショップ「信州アーリー・ミュージック村」芸術監督。武蔵野音楽大学非常勤講師。

### 石川高

1990年より笙の演奏活動をはじめ、国内、世界中の音楽祭に出演してきた。近頃は催馬楽などの歌唱でも高い評価を受けている。雅楽古典曲のみならず、現代作品や自主作品の演奏、即興も情熱的に行っている。宮田まゆみ、豊英秋、芝祐靖各氏に師事。雅楽団体「伶楽舎」や「アンサンブル室町」に所属。和光大学や学習院大学、沖縄県立芸術大学、九州大学などの講義を担当。朝日カルチャーセンターでも「古代歌謡」を担当。また、藤枝守の舞台作品では、現代神楽「薨の音なひ」や現代舞楽「織・曼荼羅」、「冬至にうたう阿知女作法」などに出演。

### パラグナ・グループ

1985年結成。インドネシア・スダ(西ジャワ)音楽のグループとして、東京を拠点にガムラン・ドゥグン、トゥンパン・スダの演奏活動を行っている。スダの音楽家との共演も多く、インドネシアのガムラン・フェスティバルにも多数参加。古典曲の他、ルー・ハリソン、藤枝守作曲の現代作品も精力的に演奏し、幅広い活動を行っている。グループ名は、スダの作曲家ナノ氏により命名されたもので、音楽によく通じている者の意。1993年、ルー・ハリソン作曲「ソリストをとまうガムランのための三つの小品」日本初演。2013年、藤枝守作曲「植物文様第19集より～オリーブの枝が話す～ガムラン・バージョン」「歌つけ般若心経～ガムラン・バージョン(伊藤比呂美新訳)」世界初演。2014年、スダ国際ガムラン・フェスティバル出演。同フェスティバルにて優秀賞受賞。2018年、藤枝守作品コンサート「ガムランを織る」開催(杉並公会堂)。 <http://www.paraguna.com>

### 佐草夏美

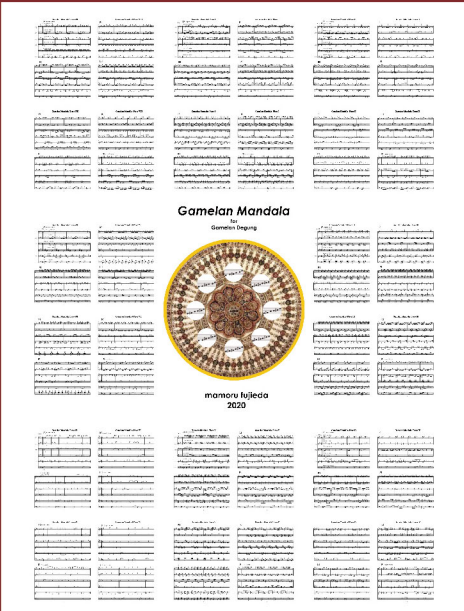
東京芸術大学音楽学部・邦楽科箏曲専攻卒業。大学在学中にインドネシア・ジャワ島のガムランと舞踊に出会い、以来ジャワ島での短期滞在を重ね、中部ジャワ地方ソロ市の王宮舞踊を学ぶ。日本人の身体でジャワの型を踊ることを生涯のテーマとし、また、様々なジャンルの音楽家との共演を追求している。

### ボヴェ太郎/Taro BOVE

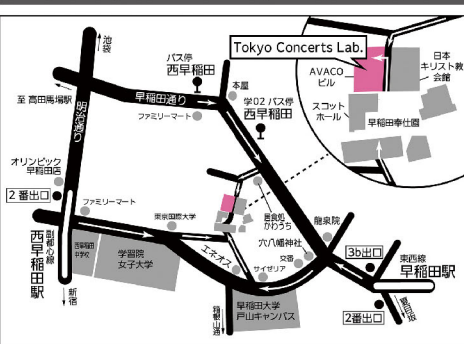
舞踊家・振付家。空間の「ゆらぎ」を知覚し、感応してゆく「聴く」身体をコンセプトに、歴史的建造物や庭園、美術館等、様々な空間で創作を行っている。主な作品に「不在の痕跡」、「余白の辺縁」、「百代の過客」他。能の古典曲を題材とした能楽との共演作品、ガムランや西ジャワの古典歌曲トゥンパン・スダとの共演等。

### 藤枝守

カリフォルニア大学サンディエゴ校音楽学部博士課程修了。博士号(Ph.D. in Music)を取得。著書として、音律の多様性や可能性を明らかにした「響きの考古学」など。今年(2020年)2月に西山まりえの演奏によるCD「ルネサンスの植物文様」がリリース。焼酎の発酵音響による現代神楽「薨の音なひ」や博多織の機音による現代舞楽「織・曼荼羅」などの舞台作品も手がける。今年3月に九州大学大学院を退官。現在、九州大学名誉教授。



## トーキョーコンサート・ラボ



- 東京メトロ東西線  
「早稲田駅」下車徒歩6分(2・3b出口より穴八幡神社方面へ)
- 東京メトロ副都心線  
「西早稲田駅」下車徒歩10分(2番出口)